

芦生からの便り 第5回



2月 冬の仕事 その2

こんにちは！芦生研究林です。
 いよいよ2月に入り、冬真っ盛り、といったところですが、皆さん、風邪などひいていらっしゃいませんか？

芦生は、今冬は、どうも雪の少ない冬になりそうな感じです。毎週来てくれる生協のトラックの顔なじみの配達員さんも、“雪が少なくて助かる？”と言っていますし、それはそれで有難いことなのですが、雪の少ない芦生というのも、何だか味気ない感じがします。

人間、っていうのは、厄介な生き物ですね。

2月、といえば、芦生研究林では「長治谷」にあるプレハブの作業所の“雪下ろし”の時期です。「長治谷」は、観測地点のある芦生で最も雪の深い所です。そして、そこに建物がある為、毎年2月の雪の厳しい時期に、2泊か3泊（その年の雪で変わります）で雪の測定と雪下ろしを兼ねて、3～4人が行かなくてはならないのです。

もともと、近年はスノーモービルで上がるのも楽になりましたし、「長治谷」でも、木造の建物が無くなりましたので、雪下ろしもぐっと楽になりました。今の若い職員には大変さと共に、芦生の閉ざされた冬の間の数少ない楽しみの一つだろうと思います。

今でこそ、世間で「芦生、芦生」と持て囃されていますが、そこでよそ者が、数年間という期限付きで生活するとなると、それはそれで苦勞なものがあります。いい季節の日帰り観光ツアーとは、違うのですから。ましてや（自分が選んだ職業とはいえ）学校を出たばかりの若い職員にとっては、戸惑うことも多いのではないかと思います。しかし、それでもなお、私の希望は、芦生に在る時には、芦生の仕事だけではなく、芦生の生活そのものを楽しんでくれる事に尽きるのです。芦生に居るからこそ出来ない事も有るでしょうし、芦生でなければ出来ない事も有るでしょう。それらを全部含めて「芦生」なのです。どちらを視るかは、個々の職員の判断に任せますが、私は、「ポジティブ シンキング」で、芦生の数年間を過ごして欲しいと願っています。

ちなみに、芦生の“ネック”であった20代の私は、「長治谷」の雪下ろしでも、“ネック”でした。昔は、ヒッコリー材の板スキー、しかも、滑り止めの「アザラシ皮のシール」を着けた重い重いスキーを履いて登るしかなかったのですが、南国育ちの私は、スキーも初心者。

雪だるまになりながら、皆について行くのがやっとでした、トホホ…。

（ここでも、周りにご迷惑をお掛けしました、この場をお借りして、当時の方々にお詫び申し上げます！！）

そして、「長治谷」には、立派な木造の建物が…。

その建物の屋根に積もった雪を降ろすのが、当時の主目的でした。

最低3泊はかかりましたが、2月には絶対、外せない作業の一つでした。

…今となっては、懐かしい思い出です。（というより、笑い話ですが。そうです、芦生の雪を少しは知っている家内は、この話をすると笑い転げます！）

「偶然」はない、全ての事は「必然」である、とも言います。

それなら、我々は、芦生に在る時間を共に楽しみたいと思います。そして若い職員にも、いつの日か、芦生に在る時を思い出して、笑って欲しいものだと思っています。

皆さんもどうぞ“今いる場”をお楽しみください。

なお、今の芦生の雪の様子は、HPの“現在の芦生”

（<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/asiu/>）をご覧ください。

（文：芝 正己）



昔の長治谷の木造小屋（上2枚）



長治谷に行く途中



長治谷の作業所



著者プロフィール

芝 正己（しば まさみ）

京都大学フィールド科学教育研究センター（森林環境情報学研究分野 准教授）所属。

京都大学および宮崎大学・三重大学を経て1997年10月より現在に至る。

専門は、森林利用学、森林管理・情報学。

これまでの主な研究テーマは、

- ① 森林の経営基盤整備計画・評価法に関する研究、
- ② 持続可能な森林管理と森林認証制度に関する研究、
- ③ 森林の資源利用と保全計画に関する研究。